

古代埃及の藝術に就て(承前)

松本文三郎

四

余輩は前數節に於て、略古代埃及藝術の變遷の大要を叙述し了つたから、今や進んで其建築、彫刻及び繪畫の遺物に就いて、簡單に記述して置かうと思ふ。

古代埃及に於ける建築の現存するものとしては先づ指を墳墓に屈せざるを得ぬ。墳墓は上古帝國時代よりして尠からず發見せられて居るが、殿堂は殆んど全く破壊せられ、其僅かに存するものは、一として第十八王朝時代に於ける修繕改築の結果にあらざるはない。神殿は後世の修繕改築を俟つて尙ほ幾分存在するを得たとはいふものゝ、宮殿若くは民家の如きに至つては、殆んど根柢より地上に消滅したといつて好い。が其偶存する所、若くは墳墓中に埋藏せられた古代家屋の模型等により、吾人は略其一定の形式を推測し得ないではない。而して埃及人の思想によれば、家屋宮殿は即ち現世に於ける人間の住する所、神殿は神の住する所、而して墳墓は即ち死

者の住する所となし何れも住宅であるから、勿論神と人と、生者と死者とにより、其大小並びに裝飾の度に於てこそ多少の相違はあれ、其大體の構造に至つては殆んど全く異ならぬ。蓋し生者が此世に於て必要とする所は、死者も彼世に於て亦必要とする所であり、人間に於て便利とする所は、神にあつても亦其便利とする所たるを失はぬからである。で先づその住宅の一般構造を見るに、貴顯と賤民と其大小固より一様でなく、又其裝飾の有無も、著しく異なるに關はず、其主要の部分としては四個の區劃から成立する。一は即ち前庭であつて、是れは家屋の前部にある無蓋の廣庭であり、家人は常に此にあつて其日を消し、又暑中には夜分も此に寝ぬるのである。之に次ぎては柱によつて支えられたる屋根ある廊下があり、北に面して開き、日光を受けざらしむる。廊下の後には廣間がある、是れ亦四方柱を以て飾り、廊下と廣間との間には戸を以て之を閉閉する。廣間の後には又柱を以て飾りたる一室あり、寢室に充てらる。要するに此前庭、廊下、廣間、寢室の四部は、埃及に於ける一切の住宅、神殿、墳墓に共通なる所であつて、唯其建築の目的並びに貧富の程度に隨ひ多少づゝ之を變形せしむるに過ぎぬ。而して現時に於ける埃及人の住宅も亦大體之に異ならぬ。但貧民の住宅にあつては、成るべく之を簡單にし、前庭に接して寢室及び家畜の置場を

作り、二階に多少の室を設くる、是れは宛も今日支那中流以下のそれと甚しく相似たものである。而して此にあつては廊下や廣間は其必要を見ないので之を缺き、家畜の置場と變じて居る。中流以上のでは其構造稍複雑となり、此四部の建築の一方には女人の室が中庭を隔て、造られ、又其他の方面には奴隸の室、厩、臺所等が建てられてある。建築の材料は總じてナイルの泥土より成れる日乾の煉瓦が其主たるものであるが、中には石材を用ゐたものもある。上流社會の建築にあつても、壁は大抵前記の煉瓦であるが、或は白堊を以て塗るか、或は色布を一面に張り、更らに贅澤なるは壁畫を描く。柱は石材又は木材で作る、是れにも諸種の裝飾的紋様や彫刻を施し、時には又寶石を彫込んだものもある。牀は普通叩タ、キであるが、中には切石を用ゐたものもある。屋根は長き木材を横に渡し、其上に藁又は葦の類を布き、其上下の部分にナイルの泥土を塗つたものである。降雨がないので雨水の排除を要せぬから、屋根は常に平面であり、其構造も極めて弱い、彼は唯日光の直射を遮るに用ゐるに止まる。

神殿の構造に至つては尙ほ一層複雑であり、而して後世となるに隨つて其複雑の度も増して來たやうである。先づ神殿の正面入口には塔門なるものがある、是れは普通民家にはあらざる所であるが、墳墓上の供養所の前面には稍之に類するものが

建てられてある。是れは印度の天門、支那の牌樓、我邦の鳥居、樓門に相當するのである。が埃及の塔門は中央通路の兩側に、金字塔に似た上部稍狭く下部廣く、長方形の底面の上に石材を積上げたもので、其表面には後世浮彫をしたものもあり、又其祭祀の時には其左右前面に各四本づゝ高く幟を掲ぐる旗竿を立つるやうに造られてある。尙ほ此塔門の前方には左右兩側にスフィンクスの列を置くこと、宛も支那明陵の前面、石獸、石像を立つると同じであり、又オペリスクを樹てたり、國王の巨大なる石像を樹つるを常とする。此塔門を入ると此に廣場がある、是れは前の前庭に相應するものである。其廣場の中央には大なる神几が設けられ、祭日には庶人皆此に集り、禮拜供養する、之より内部は普通人の入るべからざる所である。此廣場の左右には諸種の裝飾せられた柱が立てられてある、柱のことは後更らに説くから此には略する。廣場より數階の段を上り、廊下に出づる、此にも數多の柱が連立し、其前列の柱の下部には低き石欄あつて、前の廣場との區劃をなす。此廊下より後部の、眞の神殿を形成すること、宛も庶人の住宅に於けると一般である。廊下の後には大廣間がある、是れは宛も我邦神社の拜殿に相當する。而して最後に奥院がある、是れは割合に狭小なる室で、暗黒である。神像並びに祭祀の節には神像を載せて市内を練行く船が安置

せられてある。此室は最も神聖なるものであるから、國王并びに高僧のみ入るを得、彼等は此に其神と交際面接する所といふ。其周圍には尙數多の小室が造られてあるが、此等は何れも寺院の財産や、祭祀の時の必要品を貯藏するに用ゐるのである。尙ほ此には梯あつて其上部二階に昇るを得るが、二階は殿堂附屬の奴婢の住する所である。是れが殿堂一般の形式であつて、大體住宅と異ならぬことが判る。勿論後世次第に變形したものとては、大廣間と奥院との間に尙ほ二三の小室を設けたのもあり、又廊下の二重に接続し、一の廊下を過ぐれば、更らに他の廊下が之に接続するもあり、又建築地所の狭くして、前記一切の部分をつべき空地を存せざる場合には、其殿堂の一部を石窟としたものあり、又鈎形に曲折して造つたものもある。

後世塔門に浮彫を以て裝飾したことは前既に述べたが、廊下より奥院に至る迄の左右兩壁若くは天井を莊嚴するに浮彫を以てするのは、上代埃及からの慣習である。而して其塔門や廣場の如き普通俗人の眼に觸るゝ所は、國王の武功例之へば外國との戰爭、捕虜等の如きを顯はし、國民をして其勢威の赫々たるを知らしめ、廊下より後方の室には、國王が神に供養し禮拜し若しくは其恩寵を受くる圖を描く。又神殿でも墳墓でも、屋根は天に則り、牀は地に象るので、天井には普通日月星辰乃至天神を顯

はし牀或は壁の下部には國土山川草木花實等を描出すのである。

但以上説く來つた神殿の制は、近世帝國時代以後専ら行はれた所であるが、上古若くは中古帝國時代には、未だ斯く複雑なるものではなかつたらしい。今稀れに存する此等時代に於ける神殿を見ると、如何にも希臘の *Peripteros* と相似たものである。

而して其構造は尙ほ甚だ簡單である。即ち長方形の大なる神殿があり、此に神像や神船が安置せられ、其周圍は柱を以て之を周らす、而して其柱は所謂原プロトドリア式のもの（是れは便宜後に柱を叙する時に説明する）である。時としては其後部に幾多の小室を設けたのもあるやうであるが、是れは前に説いた如く宗教的儀式の時の準備の爲めや、平常此等に要する器物を貯藏する爲めに造らたたに外ならぬので、神殿の本體を形成するものではない。又其神殿の前方或は後方にオベリスクを立て、神殿の内壁并びに外壁に浮彫を以て裝飾すること前と同じであり、其外壁には王の事業を顯はし、内壁には王と神との交會を鐫することも異ならぬ。斯の形式の神殿は十八王朝の時代にも多く用ゐられ、又更らに降つてはプトレマイオス時代にも往々女神ハトルの誕生殿として造られて居るが是れが抑も埃及神殿の最初の形であらうと思ふ。前に述べた神殿の制は後世更らに其規模を擴張し、之を莊嚴ならしめたるに

外ならぬ。而して希臘古代の神殿の如きは、恐らく之よりして直接間接傳受したことも殆んど疑を容れぬ、此事は希臘の藝術が直接所謂ミノスの藝術を繼承し、ミノスの藝術は埃及と最も密接なる關係を有するものたることを知らば、思半ばに過ぐるであらう。若し果して然りとすればヘロドタスが、神凡彫像、殿堂并びに石像の彫刻を以て埃及に創まり、希臘は唯之に仿ふたといふのも、亦必らしも誣言ではないことが判る。

近古帝國時代以後の埃及の殿堂は今尙ほ諸處に存在するが、古來其最も有名なる上部埃及ルキソルの神殿に就き一言する、亦必らずしも無用の業ではなからう。ルキソルとは昔希臘人のテロペスと稱する所で、中古王朝以來の舊都であり、此殿堂は其廣大なると美麗なるとの點に於て、埃及國中一切の殿堂に冠たるものといはれた。今の殿堂は元と十八王朝のアメノフ^{ホス}（希臘人のメムノンと稱するもの、紀元前約一四〇〇年前後）の改築する所であるが、其建築の長一百四間幅三十間に亘るものであつたといふが、王は未だ全く其業を卒へずしてして没した。其後次第に之を増築し、第十九王朝ラムセス二世に至つて略現時存する形のものとなつた、當時成れる所は全長一百四十餘間に延長せられたといふ。先づ入口の塔門前にはラムセス二世の

巨像(坐像二、立像四)が立てられ、又其前には二個のオペリスクを建てた。塔門の壁には主として王の *Hittos* に對する武功を深浮彫とする門を入つては此に大廣間があり、其周圍には各二列に柱を立て、其次には細長い廊下があり、左右各一列に巨大なる柱を造り、之に接しては更らに奥行二十四間餘、幅二十八間の大廣間があり、此れも左右及前面に二列の柱を立つ。此廣間と相接して前庭があり、左右各四列の柱を作る。之と相續いて小さな堂があり、其左右亦數個の小禮拜堂が設けられてあり、これより更らに小室を隔て所謂亞歷山王の神殿に入り、其壁には亞歷山が埃及人の服を装ひ、神と交會する圖を顯はし、王の建つる所といふ。又小室を隔て最後の奥院に達する。斯の如く其構造の頗る複雑であるのは、後世次第に之を増築したが爲めであるが大體の設計に於ては、前記四種塔門を算すれば五種の部分より成立し、其増築の場合には、唯其一部づゝを重複するに過ぎないことが判る。此等建築は悉く驚くべき巨大なる石材を積み成れる所であり、又其壁や柱は共に全部彫刻を以て裝飾せられ、今は殆ど剝落しては居るが、建築當時には極彩色を以て之を彩つたのであるから、其雄大にして莊嚴なるは容易に推測し得る所である。之を以て古代希臘の神殿に比すれば、各其特色を有するが、此は寧ろ清酒にして鮮麗と稱すべく、彼は雄大にして莊重と

でも評すべきであらう。

五

墳墓を以て建築の一に算することは、少くとも普通の場合には甚だ穩當でないかも知れぬが、埃及にあつては前にも一言した如く、死者の住宅として之を造るのであり、而して其死者は永久に此に安眠するのみならず、彼世に於ても此世と同じい業務に従ふとするので、其結構亦全く生者のそれと異ならぬのである。で大體の形式をいへば、死者の棺を安置する所(普通所謂墳墓)が一般民家の寢室、神殿の奥院に相當し、而して是れは常に地下に存する。廣間は墳墓にあつては供養所であり、其前に廊下があり、之に接して前庭がある。而して後の三部は上古中古には多く墳墓の上若くは其附近地上に建てられ、近古特に十八王朝以後は何れも皆地下に發掘せられた。但埃及に於ける墳墓の制も時代によつて多少づゝ變化したことは論を俟たぬ。今其變遷の概要を述べれば大體次の如くである。

歴史前に於ける埃及の墳墓は後世墳墓の先驅をなすものであるが、尙ほ甚だ單純であつた。地上より幅四尺乃至十尺の穴を眞直に掘下げ、深さ三尺乃至六尺に達し、

其底には草蓆を布き、其上に屍體を横臥せしむる。當時は尙は未だ木乃伊の法も行はれなかつたので、衣服を着した儘膝を屈し、兩手を面前に措き、南を枕とし、西向し、左側を下にせしむるのである。木乃伊の法は施されぬが、死體の今に至る迄殆んど完全に保存せらるゝのは、全く其氣候風土の關係の然らしむる所である。屍體の傍には諸種の武器、日用家具、裝飾品、土器等を副葬することは後の墳墓と同様である。而して屍體の上には更らに草蓆を蔽ひ、壙の上部には木枝を撓めて之を横たへ、其上にも草蓆を置く。墓上には土饅頭の形を造り、其所在を知らしむるのである。歴史時代に入つては、其規模も擴大せられ、墳墓の周圍には日乾の煉瓦を以て之を繞らし、屋根も木材若くは石灰石を用ゐたが、木材の次第に行はれぬやうになつたのは、墳墓の規模益大となつた爲めて、最早や木材では之を蔽ふことが出來ず、此に後世の穹隆式の天井が創められたのである、而して墓上の高墳の東方には碑石を建て、又其前面には廣場を作り、之を以て供養禮拜の用に充て、此に既に後世埃及墳墓の形式を具備するに至つた。が尙ほ未だ藝術的作品として見るべき價值はない。

藝術的作品として觀じ得るのは、彼金字塔なるもの、製作せられてから以後のことである。今日發見せらるゝ金字塔は、第三王朝の *Nosar* 及び其相續者の造る所を以

て最古のものとする、サ、カラの所謂 Step Pyramid, Meidum の金字塔なるものが即ちそれである。此にあつては前の高墳なるものが金字形をなし、基礎の延長と共に大に其高さを増し、石灰石若くは花崗石の巨大なる切石を積上げ、表面は磨きを掛け、平滑鏡の如くならしめた。内部の構造も亦甚だ複雑整頓し、普通三部から成る。第一は通路及び棺室である。通路は外面より棺室に達する途であつて、多く鉛直に上部より石層を通じ棺室に至る、長さ五十尺乃至百尺。棺が收められてからは、其室の戸を閉ぢ、又其出入口は石塊を以て之を塞ぐ。第二は供養室であり、是れは棺室の上層に造られ、金字塔の一面に通路を設け之に通ぜしむる。死者の遺族は此に供物を捧げ、其靈を祭る、之が爲め其室内の一面に石碑を建つる。第三は Sarcophagi といひ密室であり、何人も入るを得ざる所で、此には死者の像が、時としては其妻子の像と共に安置せられる。其規模は時代の経過と共に次第に擴大せられ、第五王朝以後は其塔内各室の周壁には浮彫を以て之を裝飾し、死者の生活状態を顯はし出すに至つた。又國王の金字塔にあつては、供養室が尙ほ大規模を以て、塔の東方ナイル低地に面し、一の殿堂の如く造られた。此供養堂は又二部より成り、堂の後部には石碑並びに神几を備えた所、國王の石像安置の所、更らに之に附屬したる財寶器物を收藏する所との三種

の室があり、是等は何れも高僧若くは國王の一族のみの出入し得る所である。第は二殿堂の前部に當り入口の廣間柱を以て裝嚴せられた前庭、及び殿堂附屬の雜品貯藏室より成る。此前庭には神几を据え、庶人此に入つて供養禮拜するのである。此殿堂は宛も一の神殿であつて、其構造亦之に準じたものである。中流以上のもの、墳墓も、亦當時にあつては多く金字塔に仿ひ、唯小規模に煉瓦を積み之を造る。國王の隨從者若くは貴顯は、元と王の金字塔の周圍に其墳墓を築いたものであるが、後には各獨立に之を造ることゝなつた。尙ほ下流社會に至つては勿論斯く莫大なる費用を要する金字塔杯は之を造る餘裕を有しないから、彼等は古の廢殿若くは地下に長廊を穿ち、此に共同に埋葬したのである。

金字塔の現存するもの、其數極めて多いが、其中に就きサッカイラの所謂 Step pyramid なるものは、其建築の古きを以て著しい。此は金字塔の各邊が、六段より成れるを以て斯く名づくるのであり、恐らく當時(第三王朝紀元前約三千年)の金字塔は多く此形式を取つたのであらう。此塔は、其規模に於て必らずしも大なるものではなく、其内室亦頗る單簡で、棺室と之に達する出入の途とあるのみであるが、それにしても其高地上二百尺に達する。金字塔の最大なるものとしては、第四王朝 Khéops の作つたギ

イゼの大金宇塔がある。其れは底邊各七百五十六尺、高五百尺に達すといふ其巨大なるは之によつて容易に想像し得る。内部の構造亦甚だ複雑であり、地下室の上に今王室と稱する王の棺を置ける所があり、其前面には高二丈八尺、長十五丈五尺、幅六尺餘の大廣間が設けられ、又王妃室と稱し女王の棺を置ける一室が別に造られ、王室の上部には更らに小室數個を備ふ。當時は尙ほ浮彫の裝飾は施されなかつたが、巨大なる石灰石を磨して鏡の如くならしめ、之を積みて間髪を容れざるを以て見ても、其技工の如何に巧であつたかを知り得るのである。

設計の困難や勞力の至大なることは姑らく置き、建築として之を觀れば、金宇塔は頗る單純なるものであるが、古來の金宇塔は何れも市街を離れたる廣漠たる砂漠の丘上に作られたるものであるから、遠くよりして之を望めば何人も雄大の氣分を生じ、悽愴の感に打たれざるを得ない。金宇塔は其建築の美といふものよりも、其環境と相俟ちて人類永眠の場所として、恐らく世界倫を絶する所であらう。

第十八王朝以後は金宇塔の建立も行はれず、地下室を造つて之に代ゆるに至つた。が併し其地下室の構造は前述ぶる所と更らに異ならぬ。唯從來地上と地下とに分ち造つたものを、地下に連続したるに過ぎない。即ち始めには廊下があり、之より大

廣間に至り、時としては大廣間に入る前に前庭に相應する一室を設くるものもある。大廣間から棺室に至り、其後部には石像を安置する密室がある。尙ほ棺室の左右若くは此等の室を連續する廊下の左右に小室を設け、此に祭祀供養の時に於ける諸種器物を藏する所となす。而して此等の各室若くは廊下の壁には、或は浮彫を以て、或は壁畫を以て之を裝飾する。で此等地下の墳墓にあつては、勿論金字塔に於けるが如き外面的の美觀は失はれ、雄大の氣分も起らなければ、悽愴の感も生じない。寧ろ美はしい愉快な安眠の場所とでもいふべきであらう。而して是れ亦以て前に述べた如き上古帝國時代と近世帝國時代とに於ける埃及人心の變動を最も善く證するに足るものである。

六

建築の章を終るに望み尙ほ此に柱に就いて一言せざるを得ぬ。柱は古代建築に於ける裝飾の最も主なるものの一であり、而して埃及の柱はまた自から其特色を有し、他と大に其趣の異なるものがあるのである。

思ふに歴史前に於ける埃及の建築には、彼地に最も普通存する椰子樹幹を以て梁

となし、又其柱となしたものであらう。後世の圓柱は即ち之よりして變化し來つたのである。又煉瓦若くは石材を以て建築をなすに當つては、方形の切石を積重ね柱となした、是れが後世方柱の由つて起る所といふ。此圓柱と方柱とは、世界何れの國土に於ても然る如く、埃及に於ても恐らく其原始的の形であり、又恐らく歴史以前から用ゐられた所であらうと思ふ。

今椰子柱と稱するものは、現存する遺物必らずしも多からぬが、其現時發見せられた最古のものとしては、アプシールの供養殿のそれである、而して是れは第五王朝の製作に係るものである。是れに由つて觀ると、恐らく歴史時代の初期彼椰子樹を其儘に柱としたものを石造に代え、次第に其上部柱頭に裝飾を施すに至つたのであらう。而して當時にあつては寧ろ此形式の柱が普通に行はれた所であつたに相違ない。所謂椰子柱とは柱幹は圓くして椰子樹を其儘立てたると同じくし、唯其柱頭に椰子樹葉を幾枚も駢べ、其下部を繩にて數回捲き結ゐたるが如き彫刻をなしたものであり、其上部は葉端が幾分外部に撓み出でた形となす。是れは恐らく埃及に於ける裝飾的柱の最初のものであり、又彼椰子樹其物より自然に發展し來つた所であらう。礎石は有るのもあり、無いのもある。尙ほ希臘時代には更らに之れを複雑なら

しめ、葉端の撓み、外部に出づる所を變化し、若くは幾重にも繰返し、宛も花籠の如くならしめたものもある。が併し是れは餘りに煩瑣であつて、柱の裝飾として決して成功したものではない、之を複雑植物柱といふ。此に椰子柱といはざるは、椰子樹葉を餘りに變形したので、其果して椰子たるか將た他の植物たるか、甚だ不明となつたからである。

方柱の現存するものも殆んどないが併し是れは切石を積上ても又は石造の椰子柱の四方を削取つても、方柱となるのは自然の勢である。而して後世之より變化したと思はるゝ柱頭の柱幹が多角なるに關はず其上端は方形として存せらるゝを以て見れば、曾ては方柱も行はれたものと推察して差支なからう。方柱の四隅を削去らば此に八角柱となり、更らに其八隅を削去れば十六角柱となる。此等は何れも上中古に行はれたものらしい。多角柱にあつては、其柱基に必ず圓き枕形の礎石を置く。尙ほ後には多角形の各邊には之を削つて圓みある溝を造り、更らに其下部を次第に少しづつ細くし、柔和の趣を添ゆるに至つた。此等は前の椰子柱と大に相異なる點である。斯くして成れる十六角の溝ある柱は、之を原^{プロト}ドリア柱と稱するものである。斯く名づくる所以のものは古代希臘に行はれたドリア柱なるものと極め

て相近似し、恐らく彼は此よりして脱化し來つたものと推察せらるゝからである。此柱は埃及の中古帝國時代最も盛に行はれた所であり、今日といへどもカルナックやデル・エル・バトリ等を始めとし、諸處に其遺物の存するを見る。原ドリア式とドリア式柱との相違は要するに次の如き點にある。先づ第一には原ドリア式には、所謂 *echinus* なるものがなく、柱頭が直ちに方板ア・カズに接するのであるが、ドリア式には必ず其間に *echinus* を容れる。第二の相違の點は原ドリア式には礎石があるが、ドリア式柱は直ちに地上に立てられ、礎石はなく、イオニア式に至つて始めて礎石を置くことゝなつた。第三には原ドリア式には時あつては柱幹に溝を造らざるのがあるが、ドリア式には必ず之なくしてはならぬことゝなつて居る。が、此溝は本來原ドリア式にも總べてあつたものゝやうであるが、後世文字や繪畫の彫刻を以て之を裝飾するに當り、溝があつては不便である所から、之を平面となしたので、溝のないのは一種の變形であるといつて差支ない。

上中古帝國時代埃及に行はれた柱は多く前述の如きものであつて、尙ほ甚だ單簡である。而して是れは又當時建築彫刻の雄大なるものと洵に能く相應するのである。近古帝國時代特に第十八王朝以後には一切の藝術が寫實纖細に流るゝ傾向を

生じたので、當時の改築新建の神殿には、原ドリア式の柱は殆んど全く之を用ゐず、更らに繊巧なる柱を以てした。而して是れ亦時代人心の一般傾向に合致するものである。複式バピルス柱が即ち之を代表するものである。元來バピルスと蓮花とは埃及に最も普通に存する所であり、古來繪畫に彫刻に將た裝飾に之を用ゐること、宛と我國人の櫻花や梅花に於けるが如きである。埃及人の好尙既に斯の如くであつて見れば、彼等が此兩者を以て其柱を飾るに至つたのも、亦當然の顯象であるといはなければならぬ。斯くして蓮花柱やバピルス柱なるものが生じた。而して斯かる柱の裝飾は、上古帝國時代から既に存在したのであるが、後世となるに隨ひ愈複雑となつたのである。

均しく蓮花若くはバピルス柱といつても、此には諸種の別がある。先づ此等の各に於て單式と複式とがあり、又其兩者に蕾形と花形とがある。蓮花柱とは蓮の莖を柱幹に擬し、柱頭には蓮花の蕾若くは開いた花形を附するのである、而して其何れに於ても蕾又は花の下部には繩目を附し、繩を以て幾重にも之を捲いた如くし、其餘りの端を下に垂らした形とする。其單式とするのは、今現に遺物の存するものはないが、繪畫により判ずれば、一本の蓮莖を以て柱幹に擬したのであり、複式と稱するのは

二個以上の蓮莖を束ねたるに擬したのである。而して其一々の切斷面は圓形をなす。此柱は其柱幹に於ては原ドリア式と相似、唯其柱頭が稍彼より複雑となつたのみである。而も是れ尙ほ割合に簡素であり、近世帝國時代には既に衰えたものゝやうである。

バピルス柱とは蓮に代ゆるにバピルスを以てしたゞけて、大體の元理は前と同じい。が此兩者の間に於ける著しい相違の點は、バピルスの莖の切斷面は三角形をなすこと、柱幹の下部が後世の椰子樹柱に見る如く次第に細く圓くなつて居ることである、これは前にいつた如く頗る優美の感を生ずる。單式バピルス柱も今日遺物の現存するものはなく、現存するものは何れも複式のみである。恐らく比較的單簡質素なる建築には單式を用ゐ、神殿墳墓の如き廣大なるものには一層勞力を費して複式を造つたのではなからうか。第十八王朝以後は柱幹にも諸種の彫刻を施すこととなつたので、從來の如く三角形の集まつた形では不便である所から、其一部分を平滑ならしめ、此に文字や物像等を彫鑿せしめた。尙ほ後世には柱頭にのみ花形のバピルスを存し、柱幹は彼椰子柱と同じく全く圓形のものとなつた。變形するにも至つた、是れは疑もなく其裝飾の場所を廣大ならしむるが爲めである。斯くして柱は愈鮮麗

に愈繊巧とはなつたが、餘りに繁瑣の嫌を免れぬ。

以上述べ來つた柱は埃及に於ける最も主なるものであるが、それ以外尙ほ諸種の柱があるが、今一々之を叙する必要はなからう。唯其中に就き所謂ハトル柱なるものに就き一言し、餘は總べて之を省略することとする。抑もハトルとは元とデンドラ地方の守護神であるが、埃及に於ては最も多く信奉せらるゝ女神の一である。是れは歡喜愛情の神で、希臘人のアフロヂイトと同一視するものである、而して牝牛が其聖獸である所から、此女神は往々牝牛の角を以て、若しくは牝牛の頭を以て顯はされて居る。此柱幹は普通圓形をなすものであるが、柱頭に四個前後左右に向ひ牛角あるハトル女神の頭部を顯はし出し、更らに其頭上には殿堂の如き形を彫刻した一種特殊なる柱である。此柱は常にハトル女神に奉獻せられた殿堂に用ゐられ、多くブトレマイオス時代に造られたものといふ。で此柱は其女神顔面の彫刻としての價値は兎に角、其柱頭の部分が割合に長くなり、随つて其柱幹が短く、其間の比例甚だ宜しきを得ざると、又其柱頭が餘りに幅廣く外部に突出て居るとにより、柱としては寧しる重苦しく、決して美感を生ずるものではない。

原ドリア柱が後世希臘のドリア柱の淵源する所たるは前既に説いた。而して蓄

形の單式蓮花柱なるものは、印度の蓮花柱と甚だ相似たものであり、椰子柱や複雑植物式の柱は、後世コリント式の柱と極めた近い、此等の吾人に與ふる感情も固より同じい。但イオニア式の柱に相當するものは、埃及には嘗て存在しなかつたやうである。

七

既に建築を略説し了つたから、次に彫刻に就いて述べる。

埃及彫刻の歴史以前に始まつたことは言ふ迄もない。が現時王朝以前の製作に係ると稱せらるゝ小動物若くは人物像を見るに、宛も我邦上代の埴輪の如く、其技工尙ほ甚しく幼稚なるものである。而して上半身には稍其力を費すが、下半身は宛も腰卷を捲いた如く、何等の技工を費さぬ。而して是れは後世無數に埃及墳墓から發見せらるゝウシヤテ杯と殆んど同一形式をなす。即ち彼の人物像の下半身の宛も棒を立てたる如き形式は既に歴史以前よりして其源を發するものたることが判る。而して第一第二王朝時代に至つてや、其遺物の今發見せらるゝもの尙ほ甚だ多くないが、其偶存する所によつて之を見れば、其人物動物等の輪廓頗る精確となり、寫生の

技の著しく進歩したことは疑ふべからざるのである。象牙獸骨は其最も多く用ゐられた材料のやうであるが、是れは偶其小品の後世に存したるにより斯く判せらるゝので、恐らく此等よりも更らに大なる石材の彫刻も作られたものだらうと思はれる。當時に成れる石皿、石壺の類にあつては、アラバスター（埃及大理石）の如き稍硬質のものでも、之を削り之を磨き、諸種形状のものを作ること自由自在である。其巧妙なる洵に今日といへども恐らく其以上に出づることは甚しく困難のやうにも思はるのである。斯の如き巧妙なる技工を有するものが、石像の彫刻を作らなかつたとは考へられぬ。尙ほ上古帝國時代に於ける巨大なる彫像の製作を見れば、吾人は彼等技工の淵源する所の遠くして深きものなることを推測しなければならぬ。併しながら現時此等遺物の未だ發見せられないのであるから、精確に其技工の程度を論じ得ないのを遺憾とする。

上古帝國時代、特に其第三王朝より第五王朝に至る間、紀元前約三千年より二千六百年には、其國運の隆盛と共に、古今未曾有の大建築が造られ、隨つて彫刻亦非常の進歩をなし、其黄金時代を顯出した。彼有名なる Meidum 附近の墳墓より將來せられ、今カイロ博物館に收藏せらるゝ Ra-hotep 王と其妃 No-het の彫像の如き、第三王朝末に

作られたものと稱せらるゝが、恐らく當時製作の代表的傑作と稱して差支なからう。特に此像にあつては秩毫の毀損なきのみならず、其着色亦新たなるが如く、鮮麗にして而も浮華ならず、當時の技工の如何に巧妙なりしかを知るに足るのである。王妃及び王妃は何れも猗坐し、王は全身裸體にして唯頸に頸環を附し、腰に布片を纏ふのみである。左手は身體に沿ひ垂れて拳を膝上に置き、右手は屈して同じく拳を左の胸邊に當つる。王妃は全身衣服を着し、頸には多くの寶石を繋げたる幅廣き頸環を掛け、頭には裝飾ある女王の冠を戴き、右手は開いて之を左胸に當て、左手は衣服の下に屈して、右の側腹に當てたる如くである。顔面手足の何れも寫實に出づること疑ないが、其姿勢並びに其表顯は如何にも沈痛莊重である。技工亦殆んど間然する所ない。唯其下半身には餘り重きを措かず、専ら其精力を上半身に盡くしたものと如くである。

第四王朝に成れる彼花崗石殿内に發見せられた等身大のケフレンの石像なるものも、亦當時の遺作として著名なるものであるが、余輩は此に殆んど之と前後して製作せられた木彫の、俗に所謂 Sheikh-el-Beled 村長像なるものに就いて一言しなければならぬ。此像はサンカラに發見せられたものであるが、今より少くとも五千年前の

木像の殆んど完全に保存せらるゝといふのが既に珍とするに足る。「村長」といふのは、固より後世阿刺比亞人の命名する所で、果して何人の像なるか判らぬ。全身裸體であつて、腰より以下には布片を纏ひ、右手は下に垂れ、左手には杖を持するが、杖は勿論後世補足する所であり、足も亦近時古木を以て修繕する所に係るが、其餘は全部製作當時の儘である。身體は豐滿にして、顔面最も表顯に富み、實に偉丈夫の相を顯はして居る。技工亦前述の王妃像と同じく殆んど、間然する所はない。若し彼を以て女人像の傑作とすれば、此は正さに男子像の代表作であり、唯前者は石材(石灰石)を用ゐたるに、此は木材を用ゐた違があるだけである。是れに由つて觀ても當時の藝術家が石材と木材とを論せず、之く所として可ならざるなき靈妙なる手腕を有して居たことが判る。

第五王朝の代表作としては、同じくサッカラより發見せられた巨の石像なるものがある。是れは兩手を身體の兩側に沿へ垂下し、左足を少しく前に、右足を稍後に引き、直立した像である。立像の形式は當時大體斯の如きであつたらしい。是れ亦全身裸體で腰に布片を卷いたのみである。技工亦前の王像と伯仲の間にあり、身體殊に上半身に於ては、寫實の妙を盡して居る、而も秋毫俗氣なく、人をして莊嚴の感を生ぜ

しむるに足る。身體の彫刻は斯く巧妙に成れるが、其腰邊に纏へる布片の彫法は如何にも生硬であり、頗る厚き石を其儘に存しあると、總べての輪廓が殆んど直線若くは之に近い線を有するとにより、何となく重苦しい感を生ぜしむる。前の王妃像の衣裳の特に其上半身に纏へる部分の自然にして美はしいのと比すべからざるのである。後世の埃及彫像は大抵此例に仿ふ。身體の曲線の比較的困難なる部分を、雑作なく彫刻し得る巧妙なる手腕を有しながら、比較的單簡にして容易なる衣服に於て斯く生硬なるは甚だ奇怪の顯象であるが、是れ亦上半身にのみ其精力を集中し、其他は多く考慮する所とならなかつた結果ではなからうかと思ふ。

浮彫は第四王朝より始まり、埃及國王貴族の争ふて大規模の墳墓を築くに當り、益盛となり、第五王朝に至り其最高潮に達した。彼サカラに於けるチの墳墓に鑄する浮彫の如きは、第五王朝に成れるものであるが、恐らく此時代に於ける現存する浮彫の代表的大作と稱して差支なからう。チとは當時の貴顯豪族であつたので、其死後國王の墳墓にも劣らざる、否寧ろ之よりも一層豪奢なる裝飾を施したものと見える。其墳墓は必らずしも大ならず、又其形式に於ても他と敢て異なる所はないが、其入口の廊下より中央の廣間は勿論其棺室に至る迄所有壁面には悉く浮彫を以て

之を裝飾する。現時破壊せられた部分も尠からぬが、其大部分は尙ほ古の面目を存する。而して現存する此類遺物の最善最美のものとして、世に喧傳せらるゝのである。特に國王の墳墓の如きに於ては、何れにあつても其描き出す所は王と神との交會供養禮拜の圖にあらざれば、其武功を顯彰したもので、部分的には勿論彼此多少の相違はあるが、大體からいへば先づ千篇一律で、其何れか一を見れば他は餘り多くの興味を惹起すに足らぬのであるが、此墳墓は死者の國王にあらざるが爲め、其描く所亦彼と大に趣を異にし、社會の日常生活を顯はし、或は神前の犠牲を殺すものあり、或は家禽を料理するものあり、或は之を養ふあり、或は船に乗じて海を航するあり、其他造船の圖、收穫の圖、耕作の圖より、捕魚の状態、硝子の製造、法廷の裁判等に至るまで、諸種雑多の社會顯象が活如として顯はれ來る、此點に於ては前者に比し變化に富み、一層多くの興味を生ぜしむるのである。而して此等一々の圖面には皆之を繋ぐに其題目を以てするので、其圖と相俟つて各人の行動極めて明了を加え、當時の一般社會の状態を知るに於ても最も重要な資料となる。其彫刻の美的價值からいへば、彼丸彫に比し各一長一短あり。丸彫に於ては其彫刻の對象が唯一若くは數個に限らるゝのであるから、技術家は精力を此小部分に傾注し、靈想を此に集中することが出

來る。併し墳墓若くは殿堂の壁面の如き廣大なる面積を有するものにあつては、其局部にのみ全力を注ぐことは到底不可能である、で勢局部的には彼丸彫に於けるが如き精巧遺憾なきを得ない。是れが浮彫の丸彫に比して遜色ある所以である。併しながら浮彫は、例之へば腰邊の布片の前に張出でた部分の如き、石材を厚く殘す必要がない所から、彼の如く重厚の感を生じない、是れは前に述べたチトの丸彫と其壁面浮彫の人物像とを比較せば容易に判るのである。

第六王朝以後の埃及彫刻は次第に衰え、第十二王朝には一時稍盛となつたが、唯上古を模するに止まり、末だ大に發展するに至らず、近古特に第十八王朝となつて、埃及藝術が其最盛期を顯出したことは前既に述べた。當時の遺品は必らずしも少しとせぬが、今カイロ博物館に收藏せらるゝトトメス四世の其母と并び坐する像や、アメンホテップ三世と其妃の坐像(何れも十八王朝の作)の如き其最も上乘の作であらう。全體の形式は上古時代のそれと敢て異ならぬが、其顔面の相は著しく寫實的となり、沈痛莊重の趣は快活優美となつた。而して上代彫像にあつては王妃の冠の如き、多少の裝飾は施されてあるが、尙ほ極めて簡素あつたのが、此時代に至つては極めて纖細精巧なる線を以て、緻密なる莊飾を加ふることゝなつた。浮彫に於けるも亦之と

同じく、其頸環手釦若くは腰邊の布片、何れも前と同様の微細なる線模様を附する、此等は前者と著しく異なる所である。

八

埃及の彫刻材料としては石材あり、木材あり、銅あり、而して石材の中、石灰石が最も多く用ゐられて居るのは、其供給の多いのと、彫琢の容易なると、又其質の柔かなるとに由るのであらう。銅像には頗る古く鍍金の術も行はれたものらしい。又木身にして薄き桐板を其上全體に覆ふたものもある。土偶は何時頃から始まつたか精確には判らぬが、是れも可なりに古く存在したるに相違ない、而して中には其釉薬の極めて美はしいのや、又其彩色形態共に遺憾なく、希臘の盛時に於ける所謂タナグラに比して容易に優劣を判ずべからざるものもある。其土質は極めて粗であり、白色である。彫刻の種類には丸彫あり、浮彫あり、又線彫もある。丸彫は多く墳墓内に於ける死者の石像に見線彫は象牙等の小器物に其遺品を存する。浮彫には普通の半肉浮彫もあり、是れは主として面積の大ならざる所に用ゐらる、其面積の大なるもの、例之へば殿堂や墳墓内の壁面には、半肉浮彫は殆んど之を見ず、多くの場合には深浮彫 (relief

en creux)の法を用ゐる。所謂深浮彫とは埃及特有の術であり、他には殆んど其類を見ないものと稱せらる。普通浮彫ならば、人物花鳥等今彫刻せんとするものゝみの部分を生し、餘の石面は全部之を削り去るのであるが、深浮彫なるものにあつては、其彫刻せんとするものゝ輪廓のみ深く彫下げ、其輪廓内に於ては、半肉浮彫と同様の彫法を用ゐ、餘の石面全部には何等刀を下さざるのである。随つて半肉浮彫では其顯出されたる人物等の像は、全體の石面即ち背後の地よりも多少隆起して居るが、此にありては像の最も隆起したる部分も、餘の石面と同一の高さに達するのみである。是れが此兩者の分るゝ所である。深浮彫の法なるものは畢竟彫刻の勞力を省略する爲めに出來たので、半肉浮彫では人物等今彫出さんとする部分以外の地も全體に削去らなければならぬが、此にあつては秋毫其必要を認めぬ。で廣大なる範圍に於ける彫刻にありては、其勞力の多少に關して著しい相違がある。斯く本來は勞力の經濟を目的として起つた法ではあるが、之を遠くよりして望めば、又一種の味を有するものである。普通の浮彫では物像の輪廓と地との境界極めて判然しない恐があるが、此深浮彫に於ては極めて明確であり、如何なる遠方よりして之を見ても、其境界線の漠然として判明し難いやうな憂は斷じてない。而して宛も東洋に於ける墨畫を

見るが如き感を生ずるのである。其輪廓の線の彫下げた深さは、時代により、又其場面の大小により多少の相違あるが先づ古代にあつては普通五寸より七八寸に至り、後世のになると一尺餘に亘るものもある。而して其彫法極めて明確精巧である。勿論此深浮彫の法なるものも、東洋殊に支那や又其法を仿へる我邦の如きにあつても、絶對にないことはない。例へば招牌や門の左右に掛くる聯の如きにあつては、往々にして此法を用ゐる、固より其深さは埃及のその如き甚しきには至らず又之を畫に適用したことの有りや否は知らぬが、若し此法を畫に適用するとすれば應さに埃及と同様のものを生ずるのである。元來浮彫は彫刻といふよりも寧ろ繪畫に近いものであるが、此深浮彫に至つては、愈繪畫に接近したものといつても好い。

彫刻の題目は前節述べた所によつて略之を明かにし得るが、墳墓には必らず死者の像を安置する所から、國王、王妃、子女より、諸神との交會、供養、戰爭、捕虜、其他日常生活の狀態、農業工業等に至るまで殆んど備はらざるはない。で此點から見れば、彼支那に於ける漢代石闕の畫象石と甚だしく相似た點がある。唯其形式の相似たのみならず、其内容亦殆んど異ならぬ。彼にあつても往々一區劃毎に其上部に題辭を繫けてあるが、此れも亦同じである。但其技工に至つては、彼は尙ほ頗る幼稚なものであ

り、到底此と同日の談ではない。而して彼も浮彫ではあるが其勞力を省く爲め、時として其地に平行線を縦に彫み、人物動物等の像のある所だけは之を其儘に残し、斯くして其畫像の輪廓を知らしむるやう造つたのがある。是れは深浮彫に似て、尙ほ一層簡單なるものである。のみならず彼に於ては浮彫とはいふものゝ、當に其隆起する所の極めて薄く、僅かに其物像の輪廓外と輪廓内とが多少高低の差を有するのみならず、其隆起した部分は平面をなし、何等の凹凸をなさぬ唯少しく其間に細線を以て衣褶や眼目を鑿するに過ぎぬ。要するに是れは影畫を見るが如くて、眞に所謂浮彫と稱するに足らぬ。今埃及のを以て之に比すれば、殆んど成熟の極に達したものといつて差支ない、而して其年代を論ずれば、少くとも彼に先つこと二千年以上に溯るのである。

埃及の殿堂や墳墓内室等に於ては、其壁面、柱、天井等、何れも彫刻繪畫のあらざるなく、而して苟くも彫刻の存する所は、單獨の彫像と同じく、着色せざるはない。是れ亦後世希臘の方式の由つて出づる所であらう。而して其色は主として青、綠、赤、白、黃、黒、金である。何れも割合に單純なる色彩であるが、各之に濃淡あり、混色あり、随つて其色彩の變化は可なりに多い。現時は多く剝落して居るが、其偶々存する所によつて之

を見れば、實に鮮麗言語に絶したるものである。余輩は嘗て支那大同の佛龕に詣り、其彫像の美と其色彩の麗とを觀、感歎措く能はざるものであつたが、今埃及の此等殿堂墳墓内室の裝嚴なるを視るに當つて、尙ほ一層歎賞の念を禁ずるを得なかつた。其彫像の巧拙は彼此必ずしも容易に優劣を判ずべからずとするも、其規模の廣大なるに至つては到底大同の此に及ぶべくもない。勿論大同の佛龕も之を全體として考ふれば、必ずしも小とはいへぬが、其一々の佛龕は其作者并びに年代を一にせざるのみならず、同一佛龕といへども之と同じであるから、其一々を取つて之を論ずれば、彼此大なる相違を生ずるのである。何れにしても埃及の殿堂墳墓は實に天下の美觀であると稱して差支ない。

尙ほ彫刻の節を終るに望み、一二の注意を要する點がある。先づ第一に埃及の木石彫像にありては、後世何處にも一般に行はるゝ如く、手、腕、身體等は別々に之を造り、後に之を接合したものである。是れは必ずしも奇とするに足らぬか、眼球には水晶の如き石を嵌め、又其瞳子としては黒石を用ゐること、宛も我邦後世に行はるゝ所と同じである。尙ほ其奇なるは木像の眼瞼には、銅の極めて薄い板を以て眼の周圍に嵌込むことである、之が爲め眼の輪廓が極めて判然となる、前に説いた「村長」の木像

の如き即ち其例である。眼球に白黒石を嵌込むのは、其表顯をして生々とし、強い印象を生ぜしむる爲めなることはいふ迄もない、古代希臘にも往々之に類するものを發見するが、後世には絶えてない。が併し他石を以て眼球を嵌込まずとしても、白黒色を以て之を彩るのであるから、其結果は粗ぼ同様である。銅板を眼の周圍に嵌込むのは、果して何の爲めであるか明かならぬが、埃及婦人は今日といへども眼の周圍を黒く彩る慣習を有して居る所から推察すれば、或は之と同一理由によつて其輪廓の判然たるのを美と考へたのではなからうか。

第二に注意すべきは埃及彫像の約束コンセンサである。是れは必らずしも彫像にのみ限れる事實ではなく、或點に於ては繪畫にも通ずるのであるが、特に彫刻に於て著しく顯はるゝから、序を以て此に述べ置くこととする。

(一) 上代埃及の人物彫刻に於て、先づ第一に注意すべきは、其左右シムメトリを保てることである。若し頂上の中點より顔面胸腹を通じ、垂直線を引けば、其身體の兩部は全くシムメトリをなす。唯其手足の或は屈し、或は伸ばせる等の稍異なれるあるのみである。之を Law of frontality (シリアス・ラング) といふ。此約束は古代彫刻に於ては何れの國土にありても多少認むる所であるが、埃及に於ては殊に著しい。但是

れも丸彫に於て殊に顯はるゝので、浮彫に於ける人物像の如きは、自然活動の状態を描出することの多い爲め、必らずしも其シムメトリヲを保持せしむることは出來ない。而して坐像立像の不動の姿勢を保てるものにあつては、左右兩邊の自からシムメリトリとなるのは必然の勢であらう。

(二) 第二の特有な點は正面に向つた人物像にして、顔面は横を向はしめ、目と肩と身體とは之を正面に、而して兩足は又横に向はしむるのが多い。但是れは丸彫には未だ見ざる所で、浮彫に於てのみ存する所である。のみならず上古時代の浮彫には寧ろ稀であつて、中古以後に多く見る所である。併し十八王朝の彫像には、此等の缺點も割合に少くなつて居るやうである。其筋肉生動の状態は始んど遺憾なく顯はし出さるゝのに、此の如き單純なる寫生の出來得なかつたといふのは頗る奇怪なる顯象といはなければならぬ。

(三) 尙ほ後世の浮彫人物像にあつては、兩手の拇指を共に一方に向はしむるのがある。例之へば第十八王朝に成れる *Deir-el-Bahri* の *アメンラ* の浮彫の如き、人物像の全體としては極めて精巧に彫鑿せられ居るに關はず、拇指のみは斯かる變態を顯はして居る。是れも左右シムメリトリヲを保持せしむる所から自然に生じ來つたもの

ではなからうか。

(四)最後に注意すべきは畫面に於ける主要人物は之を大にし、其他は之を小さく彫造することである。是れは浮彫にも往々見る所であるが、丸彫人物にあつては其常則とする所である。例之へば國王、王妃は之を等身大若くはそれ以上とし、其子女の像を併せ刻するものにあつては、其下部に膝より以下若くは之よりも更らに一層小さく刻するが如きである。但此法は印度支那日本等に於ても後世往々見る所である。又事物が前後に相駢び存する時には、後方のものは前方のものゝ上に顯はすを以て其常とする。例之へば四馬の相駢び車を牽くに當つては、先づ前面より第一の馬を描き、第二の馬は其身體頭部并びに四足は各前者の上に之を重ね、第三第四は次第に之を其上に顯はすが如きである。

此等の約束は何れも多少吾人に不快の感を生ぜしむるを免れぬが、前に述べた如き其最も優秀なる作品に至つては、殆んど之を見ない、又假令ひ之に類するものがありとしても、甚だしく吾人の快感を損するには至らぬ。唯彼後世の製作に係る劣作に於て、此弊最も甚だしく顯はれ來るを見る。而して此等は必らずしも埃及藝術の眞價を左右するものではない。

最後に繪畫に就いて一言する。

埃及の繪畫には古來三種の方法があつたやうである。其一は壁畫である。埃及の壁畫は世界最古のものであつて、第三王朝の終既に墳墓内に此術の應用せられたことは前既に之を述べた。而して壁畫の作法は、壁面に石灰粉と細砂とを混じたものを押付け上に漆喰を塗り描くのであるが、純粹のフレスコではなく、漆喰の乾いた後テムペラを以て描いたものゝやうである。第二は普通のバベルスの上に描いたもので、我那の紙本や絹素の上に畫く所と同じである。第三は燒畫又は蠟畫とでも稱すべきであつて、是れは溶解したる蠟を媒介とし、顔料を其素地に侵染せしむるのである。燒畫の材料は主として木材象牙等であつて、其面積の割合に小なるものに限られたやうである。

第三王朝の末期に成れりといふ彼有名なる Mentum の鵝鳥の圖なるものは、六羽の鵝鳥の或は歩み或は啄む狀を寫したものであるが、其輪廓極めて精確にして、能く其姿態を描出してある。而して其下部には諸種の草花を寫してあるが、是れ亦簡素に

して要を得て居る。當時若し斯の如き妙技を有して居たとすれば、吾人は埃及繪畫の淵源する所の頗る遠いものたるを斷言しなければならぬ。併し其後千年の間壁畫の存するもの殆んどなく、壁畫の存すべき所は悉く浮彫を以て之に代えた。而して第十八王朝に至り、墳墓内の浮彫は衰えて、再び此に壁畫を以て之を裝飾するに至つた。壁畫を以て浮彫に代えたのは、全く其經濟上の關係からであつたらしい。墳墓内或は殿堂に於ける廣大なる壁面に、全部浮彫を以てすることは、決して容易の業ではない、で之と同一のものを壁畫に寫し、其勞力と經費とを節約したのである。壁畫の術は此時代に至つて最も發展し、前後無比の盛況を呈した。併しながら斯く壁畫は浮彫より轉じ來つたのであるから、其畫題は勿論のこと、其顏料亦浮彫に於けると秋毫も異ならぬ。諸種壁畫の中自から巧拙の存することは言ふを俟たぬ、が大體に於ては何れも細線を以て其輪廓を描き、彩色を以て之を彩り、多少の濃淡を附すること、宛も印度壁畫に於けるが如きである。而して衣服は大抵之を白くし、髪は黒くする。女人の身體は白若くは淡褐とし、男子は褐若くは黒とする。

上部埃及テーベスの附近に *Bihân-el-Mulûk* や *Deir-el-Medineh* と稱する所があり、此には諸王陵、諸妃陵と名づくるものが幾十となく存在する。何れも第十八王朝乃至二十

王朝の頃に成れるものであるが、此等の陵の内壁には、浮彫の代りに多く壁畫を用ゐて之を裝飾する。中には極めて微妙なる彩畫を以てしたのもあれば、又頗る匆々に落筆したのもある。其畫題とする所も、或は神に供養禮拜するあり、或は伶人舞妓の樂を奏するあり、或は耕作收穫の圖あり、或は葡萄を採集し酒を作るあり、或は鶉鳥を調理するあり、千態萬狀、紅彩陸離、埃及繪畫の精粹は殆ど此に概見するとを得る。殊に吾人の奇とするは、一區劃を上下に二分し、其上部には繪畫を描き、下部には文句を書くなど、宛も我邦奈良朝時代に行はれた彼因果經と全然同一なるものゝ存することである。又何れの畫に於ても當時のは其線極めて繊細優美であり、輕々に筆を下したる如くにして、而も生氣に富み、善く活動の状態を顯はし遺憾なきを得て居る。顔面は寧ろ圓く、額は割合に狭く、眦の非常に長いのは其著しい特徴であり、此點に於ては印度の婦人畫と甚しく相近いものである。

バピラスの畫なるものは何時頃から始まつたかは判らぬが、バピラス文書は今より約五千年以前第五王朝の頃既に存したといふことであるから、同繪畫も恐らく此時代よりあつたものかと思ふ。勿論現存するバピラス繪畫には斯の如き古代に成れるものではなく、大抵第十八王朝以後に屬するものらしい。此等の畫はバピラスを

幾枚も續合せ、一の卷子本となすこと、宛も支那や我邦古代の經卷の如くならしめ、其一部には文句を書き、之と相應じて或は其上部、或は前後の文句の間に挿んで繪畫を描いたのである。其描く所は何れも、死者の書又は「未來記」の節略したものであつて、死人と共に此書を埋葬したのである。昔より埃及には未來記なるものがあり、死者が此に歿して未來の世に至り、諸種の業務に従事し、或は神の裁判を受くる等のことを想像して居た。後世次第に斯の如き思想が發展し、所謂金字塔本 Pyramid text なるものを生じたのが、第十八朝の頃之を集輯大成し、後の死者の書、未來記等を成したものである。で廣大なる墳墓を築き、其周壁に繪畫を以て裝飾するにも、此書を以て其顯目となし、又斯かる廣大なる墳墓を造るに堪えざるものも、パピラスの書を描いて、死者と共に之を埋藏したものらしい。で今此等の書の發見せられたのを見るに、其書其畫共に極めて丁寧壯重なるあり、或は輕々略筆なるあり、決して一樣でない。此等は其貧富の程度によつて、自から斯の如きの差を生じたのであらう。又特に其畫に就いて之をいへば、所謂白描なるあり、淡彩なるあり、又極彩色なるもあり、其巧拙亦固より一樣でない。其上乘なるものに至つては、壁畫の壘を摩するに足るが、其多くは彼よりも遙かに劣つて居る。併し其筆法に關しては、彼此の間何等の相違はない。

何れも細線の輪廓を描き、諸種の顔料を以て之を彩つたものであるが、唯バピラスの畫に於ては濃淡の別は殆んど之を用らないやうである。輪廓内は單一色を以て之を塗つたに止まる。が濃淡の法が當時なかつたのではなく、唯其手數を略したものと思はれる。

第三の燒畫と稱するものは、果して埃及の發明に成るものなりや否を知らぬ。現時存する所は大抵紀元前後のものであつて、木乃伊の面に畫く所である。木乃伊の屍體顔面の上には、或は土製の面を造り、或は木板の上に燒畫の法を以て死者の肖像を描き、之を貼付はくるのである。中には布片に描いたものもあるらしい。今大英博物館に收藏せられ、元とフエームより發見せられた肖像畫の如きは、母親と其二子とを描けるものであるが、如何にも希臘羅馬の繪畫を見るが如く、全く寫生に出づるものである。で是れは全然前に述べた壁畫やバピラスの畫とは其の類を異にし、恐らく又埃及人の手に成れるものではなからう。古代若し埃及に燒畫の法があつたはずれば、亦自から之と其手法を異にしたものでなければならぬ。

之を要するに埃及の繪畫に於ては、其建築や彫刻に見る如き、上古帝國時代の雄大なる精神を發揮したる遺品に接するを得ないのは、吾人の最も遺憾とする所である

が併し埃及藝術の最盛期たる十八王朝前後に於ける遺品の無數に存在し、吾人が三
四千年以後の今日にあつて、尙ほ能く當時藝術家の手腕の如何を想見するを得、又之
によつて以て後世希臘羅馬乃至東方諸邦に於ける藝術の淵源する所を知るを得る
のは、亦全く其賜であるといはなければならぬ。斯して埃及藝術の研究は、嘗に古代
埃及に於ける文化の迹を顯彰するのみならず、又以て南歐藝術の由來を明かにすべ
く、更らに延いては南海諸邦の藝術史の上にも、尠からざる、光明を與ふることを信じ
て疑はぬ。其如何にして又如何なる範圍に盛化を與えたかは、更らに後日を期して
卑見を陳述したいと思ふ。(完)